論文

飛田穂洲における「武士道野球」と「型」

根　岸　貴　哉*

1. はじめに

「芸術的なバッティング」、「美しいピッチングフォーム」…野球中継や新聞、雑誌などでは、たびたびこのような言及がなされることがある。野球漫画などの創作物においても、フォームの美しさが取り上げられることが多い。このように野球においてフォームは、一般的に選手個人の、ある程度固定化された投げ方、打ち方を意味する。野球ファンもそうしたことに関心があり、日本において野球のフォームは、投げる・打つといった、単なる動作以上の価値があるものとして捉えられているように思われる[1]。

その例として、筆者は以前、野球中継において、ピッチングフォームがどのように語られているかを分析をするなかでTwitter上で一般視聴者が野球のピッチングフォームに対して、美的な印象について多く言及していると指摘した[2]。

そうした美的な印象についての専門領域は本来、スポーツ美学である。樋口聡は、「スポーツは芸術と同等に、価値的には美的な領域である」[3]と言う。そのうえで、スポーツにおける美は身体性を基盤としており、芸術において現出する美とは異なるとしている。樋口はここで、スポーツにおける普遍的な美について述べている。そのような普遍的な美についてスポーツ美学は追究してきたが、その一方で、芸術、あるいは美は、普遍的なものではなく環境や地域、社会等の価値観によって、換言すれば文化のうえにつくられたものであるという考え方もある。

だとするならば、「芸術的なバッティング」や「美しいピッチングフォーム」というような言及にも、文化的な背景があると考えることができるのではないか。本稿では、そうした仮説からスタートし、野球における美しさに関する言及が、文化的、歴史的になされるようになる過程を明らかにすることを目指す。

これまで、野球史においては野球に対する規制と、それに対して野球の教育的価値を称揚する動きが中心であったと言える。そのなかではとくに、「精神性」がピックアップされ論じられてきた。しかし、教育的価値などを除くと、野球の文化的特性などについての研究は極めて少ない現状にある。

また、野球の技術を歴史的に扱ったものも意外にも少ない。投球フォームに関する技術史としては、鈴木直樹の一連の研究がある[4]。鈴木の研究はフォームにおける技術の発展という点ではひじょうに重要である。その一方で、野球におけるフォームの文化的な立ち位置については明確にされてこないできた。

そのために二章では、「日本における野球史――「野球害毒論」と「野球統制令」を中心に」と題し、既存の日本野球史研究をたどる。とくに、「野球害毒論」や「野球統制令」など、野球への風当たりが強くなるなかで、野球が教育的に利用される過程を強調したい。そうすることによって、日本における野球の「精神性」の部分を浮き彫りにする。

三章では野球の教育的側面が強調されていくなかで、「武士道野球」が前面に押し出されたことを確認する。そのなかでも、「野球道」を強調した飛田穂洲（本名、飛田忠順）の思想を取り上げ、その内実に迫る[5]。飛田が打ち出した「野球道」という考え方は、現在に引き継がれている面もある。それは、いったいどのような考え方だったのか。またそのなかでも、とくに「野球道」の精神性に関する部分をみながら、飛田の思想を確認していく。

キーワード：野球史、武士道野球、飛田穂洲、型（フォーム）、日本文化

＊立命館大学大学院先端総合学術研究科　2018年度修了
立命館大学衣笠総合研究機構　客員協力研究員

そして四章では、精神性が強調される「武士道野球」、あるいは「野球道」のなかで、野球の技術がどのように扱われているのかを明らかにする。そこで、とくに重要とされるのが「型」＝フォームである。武道における「型」の概念を確認した後に、飛田にとって「型」がどのようなものだったのかを明らかにする。

以上を通して、飛田穂洲の思想において、型＝フォームが、美的な観点としても文化的に重要な意味合いをもっていることを示し、その背景を明らかにする。

2. 日本における野球史――「野球害毒論」と「野球統制令」を中心に

日本において野球は、明治5（1872）年に、外国人教師のホーレス・ウィルソンが第一高等中学（のちの第一高等学校、いずれも通称「一高」）の生徒たちに教えたのが、一般的にはその原初であるとされている。その一方で、野球史家である大和球士は、明治5年の段階では野球と呼ぶには値せず、野球の原型をプレーしたというのであれば明治6（1873）年の北海道大学の前身である開拓使仮学校で行われたものを最初とするべきだ、という説を提唱している[6]。その後の野球史は一高が躍進をすることによって、一高を中心に語られることが多く、また一高出身者に野球界へ大きな影響を与えた人物も多いこともあって、現在では一高が日本において最初に野球を行ったとする声が大きい。いずれにせよ、明治初期にアメリカから輸入されるかたちではじまった野球は、その後学生野球を中心に発展していくこととなる。

その一方で、様々な事件も発生していく。1890年には、一高対明治学院の試合中に、明治学院の教師であるインブリーが、試合中に正門ではない箇所から来校したことにより、応援団が激怒し暴行をくわえる、通称「インブリー事件」が起こる。さらに、1906年には応援の過熱により早慶戦が中止・無期限延長となる。

そうしたことを背景に、1911年には東京朝日新聞によって、「野球と其害毒」という連載、通称「野球害毒論」が展開される。新渡戸稲造をはじめとする当時の知識人・教育者は、さまざまな角度から、野球は教育、精神、あるいは身体によくないものであると非難したのである。木村吉次は、「野球害毒論」における野球批判の要点を、(1) 時間と場所を要すること、(2) 学業をおろそかする、(3) 品性劣悪に赴く、(4) 野球部以外の一般学生の運動の妨げになること、(5) 応援も学生を不真面目に貶める可能性があること、(6) 身体に発育に関して害悪であること、の6点にまとめている[7]。また、こうした問題以外にも、「入場料徴集、学校広告、海外遠征などの諸問題」もあったと木村は指摘する[8]。そして、「野球と教育というかたちで論議されているのであり、その際の判断の大きな枠組みは、それぞれの論者の教育理念や学生像」[9]にあり、学校制度や身体教育に対する意見の相違もあったという。

このような「野球害毒論」に反対した中心的な人物が、安倍磯雄と作家の押川春浪である。安倍磯雄は、早稲田大学野球部を創設した人物としても知られ、後の六大学野球連盟結成時の初代連盟会長も務めている人物である。また押川春浪も、早稲田大学野球部の主将を務めた押川清を弟に持つ人物であり、野球に造詣が深いことでも知られている。彼らは、他紙において野球の擁護をする論説を発表し、朝日新聞の不買運動なども行なったとされている[10]。

金崎は、野球害毒論で指摘されたような批判を乗り越えるために、「野球の有益さを示す必要もあることから、必然的にフェアなプレイが要求される」[11]ようになったと指摘する。それらは、「盗塁」のように、塁を盗み、相手を騙すようなスポーツであるという説を提唱した野球害毒論の意見に反対するために、正々堂々としたフェアプレイが要求されるという社会的背景がもとにあると考えることもできるだろう。

くわえて、そうした野球害毒論のさなかにあっては、野球部の生徒からも身体的意義、精神的意義を強調する声があったという市山の指摘もある[12]。こうした「野球害毒論」の背景に関しては、明治37年に早稲田、慶應に一高が敗れたことによって、学生野球が早慶の時代になったことが挙げられる。

それまで、学生野球の中心であった一高は、「質実剛健」や「犠牲的精神」を称揚した、典型的な武士道野球であったが、早慶といった私学は服装が華美であり、また入場料徴収をするなどの「虚栄心」があるとみなされ、野球害毒論によって批判された[13]。そうした批判を乗り越えるため、一高的な野球、武士道的な野球が安部磯雄らによって提唱されていった。

1932年には、「野球ノ統制並施行ニ関スル件」、通称「野球統制令」が発令される。これは学生野球を対象とした

ものであり、入場料や選手への報酬、応援団の統制、また学生のプロ野球ティームへの参加などを禁ずるものであった[14]。こうした背景には、当時の野球熱に対する牽制の意味合いや、学生野球の運営母体が選手やOB、マスメディアなどの民間の人々で行われていたために、政府が関与したためといわれている[15]。

中村哲也は、野球統制令について、当時人気を誇った東京六大学野球連盟の野球部は、入場料を財源として自治を行っていたが、文部省から学生スポーツにあるまじき「弊害」とみなされ、野球統制令が発令される流れがあると言う[16]。しかし、「文部省は財政と組織の両面において、学生球界の協力なしには統制を実施することが不可能」[17]な状況にあったとも中村は指摘している。それほどまでに、当時の六大学野球の人気は高かったのである。

同時に、中村はそれまで2シーズン制だった東京六大学野球が、1シーズン制を導入した過程にも注目する。文部省、および六大学野球全学は1シーズン制に賛成していたものの、早稲田大学のOBによって構成される稲門会などによって反対される。またその後、選手は自治を強めるために無監督制の導入を主張するがこれも同様にOBや大学野球関係者らによって反対されるという、選手自治対OBによる教育という構造に発展していったとしている[18]。

その後、日中戦争下において、身体と精神の向上が政府によって計られ、運動の必要性が説かれるようになる[19]。つまり、戦時下のなかで身体的な機能と精神の向上が政策として打ち出されるなかで、野球もそのなかに取り込まれていったのである。

以上のように、日本において野球は当初、学生野球を中心に発展してきた。だからこそ、野球の「教育的価値」あるいは教育への悪影響といったものに対して注目が集まってきたといえよう。そしてそこには、様々な要因によって規制されながらも、学生野球を中心に発展し、そのたびに野球の「教育的価値」が強調されるといった構造がみてとれた。なかでも野球の教育的価値においてとくに重要視されたのが、「日本的精神」や「武士道」である。それでは、「武士道野球」とはいったいどのようなものだったのか。その内容と立ち位置を確認していこう。

3. 飛田穂洲による「武士道野球」論

日本の野球は、武士道との結びつきのなかで語られることが多い。現在でも、野球日本代表は「SAMURAI JAPAN」と称されることもある[20]。鈴木康史は、1897年の一高の『校友会雑誌』においてはじめて「武士道」と「野球」が結び付けられたと指摘している[21]。

高柿健は、欧米発祥の野球というスポーツは日本人が馴染むために、日本の伝統的な武道、武士道の価値観が結び付けられ発展したと指摘する[22]。くわえて、1938年の中学野球（現在の高校野球）の選手宣誓を援用しながら、当時はマスコミによって、武士道精神における「犠牲的精神」と「健闘精神」が強調されていたと指摘している[23]。そのうえで、それらがフェアプレーと同様のものとみなされていたという。長谷川千春もまた、武士道を騎士道と比較するなかで、それらはいずれも「精神風土に沿うような形で複数の美徳が付け加えられ体系化した」[24]ものであるとし、武士道野球に関して英国騎士道の要素、すなわちフェアイプレイ精神があることを認めている。さらに長谷川は、「武士道野球」という考え方自体が、イギリスに留学した安部磯雄がジェントルマン教育に影響を受けたことによって生じたものであると主張する。

菅野真二は一高の武士道について、「死をも恐れず根性を鍛え、魂を修養する」[25]という考え方が根底にあると強調している。菅野は一高が行った根性を鍛え、精神を修養するといった「武士道野球」が日本野球の礎になったと指摘し、そうした武士道野球を通して野球道としたことを高く評価している[26]。また、高柿は、戦時下において、武士道野球は、精神主義の面がさらに強調されるようになったと指摘する。そして、戦時中の教育のなかで発展した武士道野球は、「勝利至上主義」という特色がより一層強化されることになったという[27]。勝利至上主義としての野球は、その後しばらく、日本の学生野球全体を覆い尽くす考え方となっていった。また鈴木は、押川春浪というメディア人が、誰でもプレイ可能な野球を通して武士道の脱神秘化や世俗化を進めたと指摘する[28]。そして、メディアを通しての野球の武士道化は、社会的な広がりをも見せたと有山は指摘している。それは、甲子園などの大会を通して、野球が儀礼化していったことも大きな要因であると指摘されている。そのようにして野球の価値は、多様で広範なものへとなっていった[29]。

押川春浪と安倍磯雄から影響を受け、「武士道野球」をさらに強調し、「野球道」を説いたのが飛田忠順（飛田穂洲）である。押川春浪が主筆を務めた『武侠世界』は、飛田が大学卒業後に入社し編集部員を務めたことでも知られている。飛田は自著においても「春浪武勇伝」[30]を記している。また、飛田は先に紹介した安倍磯雄の弟子にあたる人物でもあり、とくに安倍には強い尊敬の念を抱いていた[31]。飛田は、学生野球の父とも呼ばれ、1919年には早稲田大学の野球部監督に就任している。また多くの随筆を行った人物でもあり、野球界への貢献が認められ、野球殿堂入りも果たしている。そうした飛田による「野球道」とは、いったいどのようなものなのか。

> 日本の学生野球は修養の野球であり、修養の野球は趣味をすら超越し、多くの場合苦痛の野球であり、虐待の練習ともなり、涙と汗と血の連続によってようやく選手の地位が保たれる。[32]

1940年の時点で、飛田はこのように、学生野球を「修養」であるとする立場をとっている。また、日中戦争下において、国によって武道が推奨され、野球は試合数の制限などをされるようになっていたが、飛田はそうした弾圧に対して反論するかたちで「武士道野球」や「修養としての野球」といった部分を強調する必要が背景にあったと坂上康博は主張している[33]。

飛田は1950年代にも「精神力の薄弱なものは、いかに理論に精通し、技術的に抜群であっても、実践において、それを如実に表わすことが不可能である」[34]と、技術よりもまずは精神を鍛えることを推奨している。また、飛田は、1927年の時点においても「精神を涵養するものは、練習にあることを忘れてはならぬ」[35]とし、練習の重要性を語っている。そして練習に臨む際にも、「野球練習に参加するものは、これをもって道楽半分に考えることなく、あるいは斯技（しぎ）の上達のみに即することなく、学校ならば教育の一部と心得、個人ならば精神修養の一課程として、練習中何ものかを精神的方面に取得しようと心がけてほしいと思う」[36]と要求する。

飛田はこのように、練習において精神を修養することの重要性を強調する。そして、野球は「努力的精神を吹き込む点においては、もっとも好機会が与えられる」ものであり、その理由としては――勝利至上主義にもつながるような――「彼らがもし試合に勝たんとすれば、いきおい努力せねばならぬ」[37]というものであった。また「野球の練習という観念を離脱して人間修業をなすなら、必ず野球練習より一個の人格をつくることができると思う」[38]と、野球を通しての人格形成を説く。そして、「彼らが自然天日を楽しむ心に浸り、人間生活の至幸を味わうにいたることはあまりに明白であろう。この境地は実に運動宗であり、野球宗である」[39]と、運動の素晴らしさと野球を結びつけながら、修練としてのあり方を説くのである。一見すると、飛田の勝利至上主義と精神修養主義は相反するようにみえる。しかし、飛田は一貫して精神修養が前提であるという立場をとっていた。そのなかで、勝利はあくまでも精神を修養するため、本気になるような目標であり手段である、という立場であった。飛田自身もこの両者の関係性が倒錯的になっている時期も見受けられるが、後の指導者らによって、ある種のわかりやすさのある勝利至上主義が強調されるようになっていった。また坂上の主張するような戦時下において野球を統制するという背景があるなかで、飛田は自らの論を再度強調したと考えられる。

さて飛田は、試合の振る舞いに関しても、「試合の解決は至極簡単であって、スポーツマンシップすなわちわれらのいわゆる武士道のうえに立脚して行動をあやまらなければ、それで満点といっていい」[40]と、武士道を強調し、長谷川が述べているようにスポーツマンシップやフェアプレイ精神を押し出している。

たしかに、野球はティームスポーツである一方で、基本的には投手対打者という一対一の構造が成り立つ。それまでの日本の伝統的な武道や武芸の多くが一対一の構造だったということもあり、他の西欧諸国から移入されたスポーツよりも、受け入れられた側面もある[41]。一対一ということは野球が受け入れられ、発展した要因の一つではあるだろう。ただ、もちろん野球は9人で行うものでもある。

飛田は、そうした野球のティームスポーツとしての一面を活かして、「努力精神の涵養に、他愛的精神の増長等」[42]を促すのである。そして、「一時的に技術のコーチを受けるならば、特に人を選ぶ必要はないが、コーチの本質価は、形式上の技術や、その他技術に即したものを受けることによって定まるものではない」[43]としたうえで、コーチは「ティーム精神を吹き込まねばならぬ」[44]と述べ、「ティーム」の重要性を強調する。飛田はそのうえで、「野球選手気質というようなものも昔からそれぞれの学校によって異なっていた」[45]と言い、それぞれの学校の「伝統」

を重視するのである。

こうした背景には、当時、学生野球においてコーチの介入が不要という説があったことが挙げられる。飛田は、こうした考え方に対して、「技術だけに制限されずに、人間を造るということを眼目にすればいっそう希望が大きくなり、これに成功すれば中途利に誘われてティームを離れ去るような反逆者は現れぬはずだと思う」[46]と、技術を伝えるだけの指導者ではなく、学校の伝統や「ティーム精神」を理解したうえで指導できる者（OB 等）がコーチを務めることを推奨した。そして、「コーチの余徳というものは、造る楽しみでなくてはならぬ」[47]と、指導者側にも教育者としての自覚をもつように促し、「利欲観念をまったく去り、個人主義を極端に排斥して公明正大の進路を指示する」[48]べきであると主張するのである。このように、飛田にとっては「犠牲的精神」と「敢闘精神」が重要であり、それらは強化するべきであり、その強化については野球を通して行うことが最適であるとした。

飛田は野球を通して、精神的、肉体的な修行を強いる一方で、ケガや水分補給に関しては、寛容な立場だった。むしろ飛田は「夏季の練習にあっては、多量の水分を要求」[49]することを認め、「飲まねば日射病にかかるおそれがあるから、いきおい飲まざるをえない」[50]と、水分の必要性を説いている。そして、「練習時における飲料水は常用の水で結構であるが、水道でないものは試験のうち用いるがよい」[51]とし、その理由は「生水を飲むことを放任しておいたなら、必ず下痢を起こす」[52]からであると説明している。そのようにしてコンディションを崩し、試合に敗れるということを避けるべきと飛田は考えていた。

また、「肩や腕に痛みを感ずるときは投球を中止したほうがよい」[53]や、「肩の前方部に痛みを感ずる場合は、いく分危険性が伴うから、投球を中止し、整形外科の医師の診療をうけるなり、二、三日休止するなりするほうがよい」[54]といった言及もしている。しかしながら、こうした内容は「一日遅れれば、一日練習が遅れる」[55]ために、怪我をした選手だけではなく、ティーム全体の練習の和を乱す、という理由からである。

つまり、野球は、個人の精神性だけではなく、ティームという周囲への影響を含めて行動しなければならないということからも、教育的価値を強調していくのである。そしてこうした要素は、戦時中などにおいてはさらに強いものとしてみられるようになっていく。

以上のように飛田の思想は、フェアプレイ精神や、スポーツマンシップとしての側面、またそれまでティームスポーツが根付かなった日本において、わかりやすいかたちで「ティーム精神」が養われる点、また野球という競技を通して練習に打ち込み、人格形成を行える点を強調しながら、それらを学生野球の本分とするものであると言えるだろう。

さて、上記してきたような練習中心主義な「武士道野球」は当然ながら批判されることもある。そうした批判を行なった代表的な人物が、ロバート・ホワイティングである。ホワイティングは、野球への取り組みや考え方において、日米に差があることを強調する。ホワイティングはティーム一丸になることや、上下関係、既成のやり方、あるいは慣習に従うこと、また厳しい練習などに日本野球の特色を見出す[56]。そして彼は、そうした日本的な野球に適応できなかった外国人選手のエピソードを多く紹介している[57]。こうしたホワイティングの意見に対して、湯浅は、1977 年時点では日米の文化の差異を扱った点など、画期的な面も多いと評価している[58]。その一方で、具体的な事例の例示のみにとどまり、ホワイティングが批判した日本文化の「集団主義的」というものについての検証がない点や、概念の定義の曖昧さや、説明不足などもあるため留意する点も多い[59]。

現代において徐々に飛田の提唱した「野球道」は、その名残はあるものの、薄れているように思われる。「虐待」のような練習は当然行うことはできない。また過度の要求や練習、あるいは――投手の酷使の問題などを含む――勝利至上主義は、現役プロ野球選手によって、あるいはマスメディア、SNS においても批判されることが多くなってきている。しかしそれでも、依然として多くの学校においては練習時間が長く、また連帯責任や品行方正、清廉潔白な「高校野球像」を描く人も多く、高校球児もそれを認めながら「高校生らしさ」を演じているとの指摘もある[60]。

人々がそれらを求め、また演じてしまうような背景には、飛田が提唱した「武士道野球」がいまだにあると考えることができるだろう。次章では、そうした野球観のなかで、飛田の野球に関する技術がどうなっていたのか、またそれらがどのように修養と関わっていたのかを、「型」を中心に確認していく。

4. 武士道野球における「型」

飛田が、練習を「修養」と捉え、精神を重視したことはすでに述べた。では、野球の技術に関してはどうだったのだろうか。飛田は、1927 年の時点で、以下のように述べている。

> 人生修業を眼目とするならば野球技術の上達のごときは問題とするに足らぬかといえば、それは決してそうではない。技術の上達もまた大きな条件の一つである。なぜなら人間修業は技術の上達をめざして進むその過程において収穫されねばならないからである。[61]

上記のように、精神性をあくまでも重視するという姿勢は変わらない。そのなかでも、野球の技術面において飛田がとくに重視したのが、武道に倣った「型」である。飛田が武道からどのように「型」を援用したかについて述べる前に、まずは武道における「型」がどのように捉えられているのかを確認する。もちろん、「武道の型」と一言にまとめることは難しい。柔道や弓道、あるいは剣道など、それぞれの競技によって考え方や、動きは当然異なる。それでも、様々な武道において、型は重視されており、また共通点もある。さらには、そうした型をフォームと言い換えれば、多くのスポーツにおいても重要とされている。

佐藤雄哉はスポーツや武道における型は個人や集団によって構築される身体文化であり、感情的な安定を保つ効果もあると言う[62]。そのうえで、近年の武道教育について、伝統教育と国際化という二つが求められるようになったと指摘する[63]。そして、文化において「型」が重要であるとして、スポーツにも型があることを認める。たしかに、スポーツにおける型・フォームは、安定し再現性のある最適な動きを追い求めるなかで、たびたび重視される。しかし佐藤は、スポーツにおける型概念と文化の関係性を論じるなかで、フォームをスポーツにおける試合中の技術的な部分に見出さず、選手自身が試合前などに行うルーティーンへとずらしてしまっている。だが、野球では（また他のスポーツにもまた）「型」がスポーツの技と密接に関わっているだろう。

前林清和は、「型」について、「日本文化の大きな特徴の一つ」[64]であり、「歌道、華道、能楽や茶道などの武芸をはじめ様々な場面で重要な役割を担ってきた」[65]と指摘する。また、「型」の文化的な意義に関しては、美意識も含まれるとしている。さらに前林は、「型」に美的要素を認めながら、伝統もある一方で、時代によって変化するような創造性もあるとしている[66]。

続けて前林は、武道とスポーツを比較しつつ、「型」について、以下のように論じている。

> 「型」は、意図的に身体の文化性をシステム化したものであり、このシステムを練習することで理想的な技、戦術を疑似体験できるようになっている。つまり、スポーツのように技術的に部分から全体へと修得していくのとは逆に、「型」の場合、全体から部分へと修得していくことになり、相手との攻防における攻略方法やお互いの技の相対的な関係、組み合わせをひとまとまりのものとして学んでいくなかで、個々の足捌きや太刀筋をも次第に修得していくことになる。[67]

前林のこうした武道による「型」概念をスポーツと比較している部分は、有用な点もある。たとえば、理想的な技を疑似体験できるという、型における再現可能性という面は、野球や他のスポーツにもつながるところがあるだろう。野球の場合、こうしたフォームが適応される場合は、主に投球と打撃である。とくに、投球に関しては同一のフォームで投げるように指導されることが多く、その再現可能性が求められている。他方で、打撃に関しては前林の言うように、相手＝投手が投げてくる球に相対することとなり、その攻略方法や技の相対的な関係が必要となると言える。

しかし前林のこうした意見は、こと「武士道野球」という考えのもとでは、必ずしも一致しない点もある。それは、スポーツが部分から全体、武道が全体から部分へと修得するとした部分である。

そのために、野球を武士道にならって「野球道」とし、その本質を練習＝修養とした飛田が、どのように「型」を捉えていたのかを確認していくことにしよう。

打撃に関して飛田は、「フォームができてあたりがでたならば、一球ごとに打球の方向を考え、ねらい打ちのけいこもせねばならない」[68]と述べている。つまり、「型」を過酷な練習によって身につけた、その「全体」を完成させたうえで、部分を習得するという思想がそこにはあるのではないか。

また、バットに関しても「バットを長く使うか短く使うかについてはあたかも日本の剣法家に長刀を使うものと小太刀を使うものとの流派があるのと同じようなものである」[69]と、日本刀と比較する。こうした日本刀との比較はたびたびされている。「打棒の生命とするところは、剣の切れ味のごとく、打球に延びを与える使命を浴びている」[70]や、「名刀と鈍刀は切れ味が違う。よく飛ぶか飛ばぬかはバットの質の良否に任せなければならない」[71]といったように、飛田はバットを刀に見立てながら、道具に関しても武士道から「野球道」に昇華させているのである。

投手に関しても同様に、「正しく投手としての型(フォーム)をつくって投球せねばならぬ」[72]としたうえで、「とにかく投手の型(フォーム)を崩さずに投球せねばならぬ」[73]と型の重要性を強調している。さらに、「人として美点なき者は一時的には投手らしき投球はなし得ても必ず終わりをまっとうし得ない」[74]と、人間形成も強調する。

また、「投手の投球モーションはでき得るだけ、なめらかに角のないのがよい。投球の型はあくまでも美しく、からだ全体に少しも無理のないようにしたい。」[75]と、美しさについても言及する。そして、「投球の型の美しさは天恵的でもあるが、これらは十分に練習し、十分に研究するならば必ずりっぱな型となり、なめらかに無理のない投球ができる。」[76]と、修養をすすめるのである。

つまり、飛田は練習によって型を身につけることは、人格形成や修養にもつながると考えていた。個性は認めながらも、厳しい練習によって美しい型を身につけることは、同時に素晴らしいを人格形成し、反対に美しくない型の投手は一時的によい投球ができたとしても、人として大成しないと考えたのである。

前林をはじめとして、「型」には日本文化としての特徴をみる場合が多い。たしかに、野球においても「フォーム」は、アメリカではメカニカルなものであるとされる。つまり、精神性や美をフォーム＝型に見出すというのは日本的な特徴でもある。そうした特徴はまさにこれまで述べてきたような武道との関わりが強いからこそおこるものでもあるだろう。現在においても、美的な観点から野球のフォームは語られることがある。飛田の思想においては、野球は武士道の影響もあって「野球道」であり、そのため「型」＝フォームを重視するものだったのである。そして、その背景には、飛田の武士道野球の思想が色濃くあらわれていると考えられる。

5. 結

本稿ではこれまで、日本における野球の発展と武道との結びつき、そしてそのなかでの「型」概念をみてきた。

学生野球を中心に発展した日本野球において、教育的価値は大きな価値を含んでいた。「野球害毒論」や「野球統制令」といった、野球が人気であるがゆえに、その反対意見や運動が高まっていたために、教育的価値を強調する必要性もあった。また、ティームスポーツとしての特性を活かし、「他愛」を強調するようになっていく。そして、そのなかで日本の伝統と結びつくかたちで「武士道野球」や「野球道」といったものが成立していくことになる。

ついで、飛田穂洲の思想である、「武士道野球」を確認した。これは練習を中心にし、教育的な価値を持ちながら精神を修養するといった考え方であった。なかでも「野球道」を強調した飛田の思想は、野球を通しての修養を求めるものであった。飛田の思想に関しては、これまで精神修養としての一面が多く取り上げられていたが、野球の技術的な点における飛田の思想は多くの言明がされずにきた。飛田の精神修養としての「野球道」における技術の扱い、またそうした技術を通した野球や精神との関わりに本稿が焦点を当てたことは、スポーツ社会学や野球史に対して意義があると言えるだろう。こうした考えには近年、批判的な声も高まっているが、それは同時に武士道野球などの影響がいまだにあることの証左でもある。

一方で、飛田は技術的には、日本の伝統ともされる「型」を重視していた。そこに精神的にも、視覚的にも、美的な要素を見出していた。飛田はそこで、「正しく」、「なめらかに角のない」、「美しい」ものを求めた。それは一見すると、選手の動きに対して、工学的で理にかなった規範性を重視しているようにも思える。

しかし、それだけにとどまらず、美しい型を厳しい練習によって獲得することは、同時に人間として精神的にも成長することにつながるとしたのである。つまり、そうした美しいフォームは、身体的・視覚的なものだけにとど

まらず、その選手の内面性をも表象していると考えていたと言ってよいだろう。ゆえに、修養によって磨かれた——心身ともに——美しいフォームを、規範として求めたのである。このように、そこにおける「正しさ」や「美しさ」は精神的な規範も含んでいる。

「規範性」が内外問わず、美しさ、あるいは「かっこよさ」に影響を与えることは春木有亮によって明らかにされているが[77]、野球のフォームに対しても、そうした規範性が認められるのである。そして、そうした規範性の背景には、工学的な要素はもちろんのこと、「伝統」や「文化」もあると言える。

現代においても、フォームを美しいとするような風潮は日本において多くみられる。一方で前林は、武道においても「型」が、珍しさや前例に準拠しない「今様」によって美しく思えると言う[78]。くわえて、型には「時代を超えて継承されるだけの価値があったからであり、そこにはわれわれの心を揺さぶる普遍的な美的要素」[79]があると指摘する。

スポーツに照らし合わせるならば、科学技術の発展、スポーツ工学の発展による理論的な面、あるいは選手たちの工夫などによって、フォームは常に改良されながらも、美しく思われるということに適応できるのではないだろうか。

また、飛田はまさしく、野球を「野球道」とし、普遍的な価値を見出し継承していくことを説いた。そのなかでの精神的な部分——もちろんそれも「今様」によって変化しうる——からもまた、フォームへの美しさを総合的に見出しているのではないか。フォームの美しさをめぐる判断のなかには、少なくとも日本においては、これまで述べてきたような歴史や価値観の反映があると思われる。

すなわち、実際にあるバッティングフォームやピッチングフォームが美しいかどうかではなく、野球が武道と結びつくなかで、美しいとされるようになったと考えることもできるのではないだろうか。そのようにしてスポーツにおけるある種の精神性のあらわれとして、フォームがあるということを示したという点はスポーツ美学にも、新たな視座を与えたと言えるだろう。もちろん、全く異なるアプローチ——たとえば、スポーツ美学のような観点——をたどればある特定のフォームに対して、武道との結びつきや規範性以外の観点から美しさが認められる場合もあるだろう。また、飛田のこうした思想について、どこまで日本野球一般に適応できるかは、議論の余地がある。以上の二点に関しては、今後の課題としたい。

注

1　こうした「型」という概念は、野球においては、基本的に打撃および投球について用いられ、守備の捕球や送球に用いられてることは少ない。そのため、本稿では主に言及がなされる、投球および打撃に関する型（フォーム）を取り扱うこととする。

2　根岸貴哉「野球実況におけるピッチングフォーム批評」『スポーツ言語学研究』Vol.1、pp.2-18、2016 年。

3　樋口聡『スポーツの美学』不昧堂、1987 年、p.269。

4　鈴木の研究に関しては以下を参照。

鈴木直樹「野球における投手のオーバースローの運動技術史——競技規則との関係から——」『スポーツ史研究』Vol.28、pp. 49-70、2015 年。

鈴木直樹「野球における投手の「オーバースロー」の構造体系化に関する一考察——運動技術史を基礎資料として——」『スポーツ運動学研究』Vol.28、pp.99-115、2015 年。

鈴木直樹「日本野球におけるアンダースローの運動技術史」『スポーツ史研究』Vol.32、pp.31-46、2019 年。

5　なお、飛田の文献を参考、引用する際には現代仮名遣いが用いられている選集を参照した。また、それぞれの初出に関しては以下の通り。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第一巻　野球生活の思い出』「春浪武勇伝」ベースボールマガジン社、1960 年。なお初出は『野球生活の思い出』（朝日新聞社）の第三版（1927 年）に加筆・修正を加えたもの。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球清談」ベースボールマガジン社、1960 年。なお初出は『野球清談』東海出版、1940 年。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球は無私道なり」、初出は 1948 年、話社から『野球道』という題名で刊行されたもの。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球への情熱」の初出は、雑誌『ベースボール・マガジン』（ベースボールマガジン社）より 1956 年 10 月号から 1957 年 8 月号に掲載された「野球生活の思い出・記者篇」、および同雑誌の 1957 年 8 月号「甲子園球児を与う」、

そして同雑誌 1958 年 3 月号の「学生野球にシーズン・オフはない」。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール攻撃編練習編』ベースボールマガジン社、1959 年。なお、初出は『ベースボール攻撃篇』実業之日本社、1927 年。

飛田穂洲『飛田穂洲選集第五巻　ベースボール守備編』ベースボールマガジン社、1960 年。初出は『ベースボール内野篇』実業之日本社、1928 年および『ベースボール外野及び練習篇』実業之日本社、1928 年。

6　大和球士『真説日本野球史　明治篇』ベースボールマガジン社、1977 年。

7　木村吉次「いわゆる「野球害毒論」の一考察」『中京体育学論叢』Vol.3、pp.103-123。

8　同上。

9　同上、p.108。

10　玉置通夫「野球害毒論争研究――新聞社間による部数獲得競争の視点から」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』Vol.47、pp.53-58、2011 年。

11　金崎泰英「日本野球界のエトスの検討――学生野球に求められる「精神性」の歴史的変遷」『現代社会文化研究』Vol.53、pp.73-90、2012 年、p.78。

12　市山雅美「旧制中等教育学校の生徒の作文にみる道徳性 ――明治期におけるスポーツと道徳の連関の言説」『湘南工科大学紀要』Vol.50-1、pp.97-107、2016 年。

13　木村吉次「いわゆる「野球害毒論」の一考察」『中京体育学論叢』Vol.3、pp.103-123。

14　金崎泰英「野球の健全性をめぐるわが国のプロ野球と学生野球との関係の変遷――1930 年代から 1950 年代を中心に」『現代社会文化研究』Vol.59、pp. 127-144、2014 年。

15　金崎泰英、前掲「日本野球界のエトスの検討――学生野球に求められる「精神性」の歴史的変遷」。

16　中村哲也「「野球統制令」と学生野球の自治――1930 年代における東京六大学野球を中心に」『スポーツ史研究』Vol.20、pp.81-94、2007 年。

17　同上、p.90。

18　同上。

19　市山雅美、前掲書。

20　なお、野球日本代表の「SAMURAI JAPAN」といった名称については、電通主導によるものであり、本稿で扱うような意味での武士道や侍とは厳密には異なる。「SAMURAI JAPAN」については以下を参照。

平方彰『「野球」が「ベースボール」になった日』日之出出版、2014 年。

21　鈴木康史「明治野球の〈遊〉と〈聖〉――遊戯・武士道と押川春浪」『スポーツ社会学研究』Vol.24-2,pp.21-39、2016 年。

22　高柿健「高校野球フィールドマネジメント 4.0 ――「武士道野球」と「スポーツ野球」の信念対立の克服を目指して」『城西大学経営紀要』Vol.16、pp.145-155、2020 年。

23　同上。

24　長谷川千春「ジェントルマンからサムライへ――日本武士道野球における英国騎士道」『立命館言語文化研究』pp.217-226、2019 年、p.224。

25　菅野真二『ニッポン野球の青春――武士道野球から興奮の早慶戦へ』大修館書店、2003 年、p.174。

26　同上。

27　木下秀明『スポーツの近代日本史』安林書院、1970 年、p.112。

28　鈴木康史、前掲書。

29　有山輝雄『甲子園野球と日本人――メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1977 年、p.107。

30　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第一巻　野球生活の思い出』「春浪武勇伝」pp.315-353、ベースボールマガジン社、1960 年。

31　『野球殿堂 2012』野球体育博物館編、ベースボールマガジン社、2012 年、p.11。

32　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球清談」、p.30 。

33　坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001 年。

34　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球への情熱」、p.315。

35　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール　攻撃編練習編』、p.316。

36　同上、p.252。

37　同上、p.319。

38　同上、p.252。

39　同上、p.319

40　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』「野球は無私道なり」1960 年、ベースボールマガジン社 、p.235。

41　伊藤公雄「We Japanese, gotta have WA? ――日本のスポーツ文化と「集団主義」――」『スポーツ社会学研究』Vol.17-1、pp.3-12、2009 年。

42　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール　攻撃編練習編』、p.319。

43　同上、p.328。

44　同上。

45　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』、「野球清談」、p.152。

46　同上、p.22。

47　同上。

48　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール攻撃編練習編』、p.319。

49　同上、p.247。

50　同上。

51　飛田穂洲、前掲、『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール攻撃編練習編』、p.247。

52　同上、p.249。

53　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第五巻　ベースボール守備編』、p.172。

54　同上、p.66。

55　同上、p.244。

56　ロバート・ホワイティング『菊とバット【完全版】』松井みどり訳、2005 年、早川書房。（Robert Whiting　*The Chrysanthemum and the bat: The game Japanese play* Permanent　1977.）

57　ロバート・ホワイティング『和をもって日本となす』玉木正之訳、角川書店、1990 年。（Robert Whiting　*You gotta have Wa* Macmillan　1989.）

58　湯浅成大「「文化野球論」（仮）宣言序説」『社会イノベーション研究』Vol.13-2、pp.161-180、2018 年。

59　同上。

60　竹村直樹「高校野球部員の意識と行動の分析――ドラマトゥルギーの方法を通して分析する」『龍谷大学社会学部紀要』Vol.44、pp.59-69、2014 年。

61　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール　攻撃編練習編』、p.252。

62　佐藤雄哉「礼とマナーの身体技法――武道の文化的特性を巡って」『体育・スポーツ哲学研究』Vol.40-2、pp.119-130、2018 年。

63　同上。

64　前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院、2006 年、p.127。

65　同上。

66　同上。

67　前林清和、前掲書、p.135。

68　飛田穂洲、前掲『飛田穂洲選集第四巻　ベースボール攻撃編練習編』、p.55。

69　同上、p.19。

70　同上、p.9。

71　同上、p.10。

72　飛田穂洲、前掲、『飛田穂洲選集第五巻　ベースボール守備編』、p.110。

73　同上。

74　同上、p.42。

75　同上、p.46。

76　同上。

77　春木有亮「「恰好」から「かっこいい」へ――適合性 suitability の感性化」『人間科学研 究』Vol.13、pp.1-30、北見工業大学、2017 年。

78　前林清和、前掲書。

79　前林清和、前掲書、p.129。

Suishu Tobita's Idea of Bushido Baseball and Form

NEGISHI Takaya

Abstract:
This paper provides a textual examination to show how the forms of Japanese baseball gained a philosophical value affected by Suishu Tobita's idea of Bushido Baseball, not just as the value of physical practice. The process by which forms in Japanese baseball came to be regarded as beautiful due to the influence of Busido baseball of Suishu Tobita's idea. For theat purpose, I examined documentary records. First, I gave an overview of the history of Japanese baseball. Since Japanese baseball history developed from student baseball, an educational value was indispensable. The value was also found to contain the ideology of dedicated training or the development of spirit, each of which is an factor of the Samurai code as often preached from a pedagogical point of view. Such ideas were promoted by Tobita as Yakyudo, the spiritual discipline of baseball, in which players should learn to train both mind and boy only by mastering perfect forms（*kata*）of baseball just like the samurai warriors do those of martial arts. The result shows the fact that Tobita's philosophy of Bushido baseball playedfan important role in the cultural context of *kata* traditionally seen as beautiful and meaningful in Japanese baseball history.

Keywords: Japanese baseball history, Busido baseball, Suishu Tobita, form（*kata*）, Japanese culture

飛田穂洲における「武士道野球」と「型」

根　岸　貴　哉

要旨：
本稿は、野球のフォームが飛田穂洲（飛田忠順）による武士道野球の影響によって、「型」として動き以上に価値のあるものであることを文献資料を検討しながら示したものである。そのためにまず日本における野球史を概観した。学生野球を中心に発展した日本野球において、教育的価値は欠かせない要素であった。ついで教育的価値の内実としても語られる武士道の要素、すなわち練習中心主義、あるいは精神を鍛えるといった内容を先行研究から確認した。こうした内容は「野球道」として飛田穂洲が広め、その思想は野球を「修養」とするものであった。飛田は練習によって美しい型を獲得することによって修養にもつながると考えていた。これによりこれまで暗黙のうちに美しく価値あるものとみなされていた日本野球におけるフォームの文化的背景に、飛田の武士道野球という思想があることを示し、野球史やスポーツ美学などの研究領域に対し新たな視座を与えた。